

# 方言イメージが作り上げるドラマ —NHK 地域ドラマが再生産する地域ステレオタイプ—

熊谷 滋子

## 要 旨

方言ブーム、方言尊重とうたわれている今日、日本語社会は依然として標準語を基本とし、方言を周縁に位置づける社会であることを、東北と関西を舞台としたテレビドラマから検証する。ドラマでは、東北は東京と対極に位置する田舎であり、自然あふれる童話の世界として描かれる。東北方言は若い女性、知的な男性には合わないイメージが反映され、より強く周縁化されている。一方、関西は東京を意識しない、国際的な都市のイメージを押し出し、「お笑い」や「けんか」が活発に展開される場として描かれる。関西方言は基本的に登場人物全員が使用できるため、それほど周縁化されていないように思われる。が、あらたまった場面や外国語の翻訳では標準語が用いられるため、ソフトに周縁化されている。田中（2016）が実施した方言イメージの調査結果、「東北＝素朴、温かい」「大阪＝おもしろい、怖い」にぴったりなドラマとなっている。メディアは、このようなイメージを再生産している。

キーワード：標準語、方言イメージ、ステレオタイプ、テレビドラマ、メディア  
表象

## 1. はじめに

方言がドラマなどのメディアに利用されるようになり、地方が注目され、見直されてきたようなムードがある。田中（2016：114-116）は、2015年に実施した方言意識調査をもとに、テレビドラマが「方言ステレオタイプ」の形成に大きな影響を与えていると論じている。今回は、2017年にNHKが放送した地域ドラマを対象に、方言地域がどう描かれているのか、従来のステレオタイプと比べて変化した点があるのかなどを探る。結論からいえば、タイトルに示したように、従来の方言イメージや地域のステレオタイプを再生産するものになっており、むしろ、そのイメージやステレオタイプをもとに

してドラマが作られているのではないかとも感じられるほどである。最後に、そのようなメディアにみられる表象の、今日的傾向についてふれる。

## 2. 標準語／「女ことば」イデオロギーと方言

日本のみならず、どの国においても、国民国家の形成にあたって、ことばの統一を目指し、標準語への機運が高まることは周知のことである。日本においては、明治以降、「教育ある東京人の話す」ことばを標準語とし、日本国民全員にその使用を求めてきた。第二次世界大戦後においても、「標準語教育」が重視されてきた<sup>(1)</sup>。一方、標準語に選定されなかった地域のことばは、非標準とされ、矯正や撲滅の対象となるなど、地域のことばを話す人々とともに周縁化されてきた。これが、「標準語イデオロギー」である。

また、二項対立的な発想から性差が強められ、ことばの面においても、標準語の女版である「女ことば」が要請されるようになった。その成立要因や成立過程などについては、中村（2007）に詳しく論じられている。日常生活において実際どれだけの女性が「女ことば」を使用してきたかという点については、様々な議論があるため、ここでは深く立ち入らない。今回は、むしろ、女らしくあれという戒めとして、いわば規範として「女ことば」が存在してきたという主張に注目する。これが「女ことばイデオロギー」である（佐竹2005、中村2007、Okamoto and Shibamoto-Smith 2016）。

これらのイデオロギーにより、女性の方言話者は、標準語と「女ことば」からはずれているという意味で二重に負い目を感じることになる。女らしいというイメージが強い京都方言は別にして、特に東北方言は若い女性にふさわしくないというイメージが強く存在してきた（井上1977a、1977b）。

以上の社会的文脈の中であって、今回は特にメディアにおけるマイノリティ言語としての方言の表象に注目する。映画やテレビドラマなどにおけるマイノリティ言語の表象については、特に欧米での研究が盛んである（Meek 2006、Hill 2008、Bucholtz and Lopez 2011、Lippi-Green 2012、Higgins and Furukawa 2012）。それらでは、人種的、民族的、あるいは地域的マイノリティが、「標準語」からはずれた言葉遣いをしており、否定的な性格づけ

をされていると主張している。つまり、標準語を話す白人に代表されるマジョリティからみて、マイノリティは他者化され、周縁化されて描かれているのである。

日本語の方言のメディアにおける表象については、役割語としてその起源を論じた金水（2003）、「方言コスプレ」という命名で知られた田中（2011）、戦隊ヒーロー番組における沖縄方言について論じた高橋（2010、2011、2012）、NHK連続テレビ小説における宮崎方言を分析した Shibamoto-Smith and Oggi（2009）や東北方言を分析した熊谷（2014、2015）などがある。

### 3. 調査対象と分析方法

調査対象とするのは、2017年にNHKが放送した2作品、『私の青おに』（山形県高島町が舞台）と『アオゾラカット』（大阪府西成区と大正区が舞台）である<sup>(2)</sup>。東北と関西は、いずれも「方言イメージが濃い」地域である（田中2016）。

分析方法は、会話を書き起こし、まず、登場人物について、方言使用の有無とそれらの性格付けをまとめ、次に使用された方言や標準語の特徴を例示し、さらに、地域のイメージ喚起の要素を検討し、全体的な表象のされ方について考察することとする<sup>(3)</sup>。

## 4. データ

### 4.1 あらすじ

2作品はともに、若いころに故郷を離れていた主人公が、仕事や親の訃報で故郷を訪れ、親や友人との和解や地元の人たちとの交流を通し、故郷を見直し、元気を取り戻す話である。

『私の青おに』の主人公は東京の出版社に勤務する若い女性・辻村莉子である。彼女は高校時代いじめにあった。そのときかばってくれた唯一の友人・夏目が逆にいじめのターゲットになり、辻村がいじめグループに入るように声をかけられ、戸惑う。夏目はそんな辻村を「行きなよ。私は大丈夫」と励ます。辻村は東京に進学し、今は出版社に勤めているが、夏目に負い目

を感じ、故郷とも疎遠になっていた。そんな折、高島町が地域おこしの一環として、地元の童話作家浜田広介の『泣いた赤おに』の続編を出版することになり、辻村はその作業にかかわることになる。久しぶりに故郷を訪れ、作品の思いにふれ、地元でワイン作りに励む夏目とも再会して和解し、地元の人々とのふれあいを通して、田舎だとバカにしていた故郷を見直し、元気を取り戻す。辻村にとって夏目が「青おに」だったと気づくのである<sup>(4)</sup>。

『アオゾラカット』の主人公はパリで美容師をしている若い男性・川村翔太である。実家の美容室「アオゾラ」は両親がつくった店である。川村は、父の浮気が原因で家を出て行ってしまった母の死の知らせを受けて、葬儀のため急ぎ帰国する。彼は母のことで父にずっと反発していた。久しぶりに故郷に帰ってきても、相も変わらず勝手な父と、つついけんかをしてしまう。その後実家の手伝いをするはめになるが、そこの助手（若い女性）や地元の人たちとのふれあい、ボランティア活動、外国人観光客への売り込みなどを通して、接客のしかた、人間関係の大切さなどを学んでいく。そして、母が家出したのは実は脳腫瘍のためであり、父は母のことをその後もずっと看病していたことを知らされる。川村は父を見直し、実家で働く決意をする。

## 4.2 方言話者と標準語話者

ここでは、登場人物の方言使用の有無と性格づけについてみていく。

### 4.2.1 『私の青おに』

まず、東北方言を使用する人物に、主人公辻村の両親、何度か開かれる宴会や出版作業の打ち合わせに参加する、中年から老年の地元の人たち（男女）がいる。

また、回想にでてくる高校時代の辻村とその同級生の女性たちが若者ことばを基本に方言を少し使っている。さらに、宴会で1～2度登場する地元の友人女性たちも方言を使う。その例として、宴会で再会した、当時いじめのリーダー格だった同級生をみてみよう。高校時代の彼女はやせていて、典型的なギャル風だったが、その後結婚し、子どもができて、「30キロ」も体重

が増え、宴会で辻村に声をかけてもまったく思い出してもらえないほど風貌が変わってしまっていた。彼女はこういう。

「わがんねえよねー だって、わたし 高校のときから、30キロ太ったから」

ところで、辻村は基本的に標準語を話す、一度だけ方言を使うことがある。彼女は地元にある浜田広介記念館の学芸員（森岡広太）に対して快く思っていなかったが、実は森岡が「りっぱな大学」をでて、「東京からわざわざ」移り住んできたのだと母に教えられたときに思わず方言を口にする。「あれ、森岡君がこの町の人でねがったの？」とびっくりしてしまう。

次に、標準語を話す登場人物をあげる。女性では、辻村、そして、夏目、続編のイラストを担当する若い女性、学芸員である森岡、地元出身で東京在住の作家である辻村の元カレなどである。彼らは、丁寧な標準語、女性ならば「女ことば」、男性ならば「男ことば」なども使用する。

夏目はブドウを生産する農家に生まれ育ち、一度も県外に出たことはない。「濃い」東北方言を話す父親が一度出てくるものの、彼女はあくまで、標準語もしくは「女ことば」しか話さない。

まとめると、東北方言話者は、中年から老年にかけての地元の人、特に女性の場合は、回想場面での高校生、1～2度登場する地元の友人、そして同級生でも「おばさん」タイプの人であり、ドラマの中ではいわば端役を演じる人である。一方、標準語話者は、地元出身、地元育ちであっても、主人公を含む中心的な役を担っている、(魅力的な)成人した若い女性や、イラストレータなどの今風の職業についている女性、知的な職業(学芸員、作家)についている男性などである。つまり、東北方言は男女ともに、端役や中年以上の人を使うイメージをもち、主人公などの中心的な役を演じる(魅力的な)成人した、(今風の職業の)若い女性や知的な職業についている男性には合わないものだというニュアンスが感じられる。東北方言は、あくまで東北が舞台であるということを示すために、主要な役以外の登場人物や回想シーンを中心に用いられるにすぎない。

#### 4.2.2 『アオゾラカット』

この作品では、基本的に登場人物は大人から子どもまで、ほぼ全員が関西方言を使用している。標準語話者は、1～2度登場する端役の、銀行員や全国チェーン店の社員ぐらいである。しかし、主人公でもあらたまった場面や、見知らぬ人、地元の人でも年上の客などには標準語を使用する。また、外国語（外国人や主人公の話す英語など）の翻訳字幕には標準語、もしくは「男ことば」や「女ことば」が使われており、方言使用に制限がある。

#### 4.3 使用された方言・標準語・「女ことば」

具体的に会話を取り上げ、使用された言葉遣いの特徴をみていく（太字の部分の特徴を示しているものである）。

##### 4.3.1 『私の青おに』

###### 4.3.1.1 東北方言

まず、特に目立つのは発音面である。具体的にみると、濁音化（有声化）（わがる、みんないだから、おぼえでる、うづさせてよ（写させてよ））、二重母音の融合化（たりなぐねー、つみとらねーで（摘み取らないで））、発音変化した「書いてける」（書いてくれる）などがある。

また、東北方言でよく知られた「んだんだ」「んだず」などのあいづちが頻繁にでてくる。語彙については、辻村の母が、客から注文を受けたときに、「おしょしな」（ありがとう）と感謝する例しかない。

統語面では、よく知られた、方向を示す格助詞「さ」が使われている。

東京さ行って こっちさ来て 店さおいでくれって（置いてくれって）  
文末表現は、「～（だ）べ、～べ／べした、～なっす、～だず、～なんえ、～はー」などが随所に使われている。

莉子ちゃんだべー（でしょう）、 田舎じゃうれないんだず（売れないらしい）、  
そいつが伝わってくっぺした（伝わってくるだろう） くらべ（食べよう）、  
10年になってはー（なってね）

概して、語彙よりも、濁音やアクセント、イントネーションなどの音声面

と文末表現を中心とした東北方言が使用されている。東北方言の特徴の一つである自称詞「おれ／おら」は誰も使用していない。

#### 4.3.1.2 標準語・「女ことば」

主人公辻村をはじめとする中心的な役柄の登場人物が標準語を使用している。女性の場合は、「女ことば」も用いている。たとえば、辻村が元カレの作家に、「友達がね、ワイン作ってるの」と電話で話す。あるいは、学芸員森岡に対して、彼女が大きな出版社をやめた理由を問われ、「いい加減にしてよ」と怒り、その作家とは「担当者兼恋人だったわ」と打ち明ける。また、東京の出版社の社長に対する説明責任について、「自分がしたことの責任はちゃんと取るつもりよ」と語る。

夏目も、基本的に標準語で語り、「いじめがはじまったの」「父親に言われたの」など、「女ことば」も使う。

一方、男性では、森岡は丁寧な標準語を使い、辻村に対しても、終始「駅まで車で送りますよ」といった調子である。元カレは、講演会の場面では、丁寧な標準語で語り（「自分が生まれ育った町を舞台にした小説をたくさん書いてきたような気がします」）、辻村に対しては、くだけた「男ことば」調子である（「もう会うこともないと思っていたから言わなかったけどさ」「気をつけてな」「かなわないよな」）。同郷どうしても方言は一切使わない。

#### 4.3.2 『アオゾラカット』

##### 4.3.2.1 関西方言

まず、音声面では、「ええ」（いい）、促音化・拗音化した「うっさい」（うるさい）、「ちゃう」（違う）、「すっきゃねん」（好きだ）などが使われている。動詞では、音便化した、「こうた」（買った）、「笑うて」（笑って）などがある。

語彙では、自称詞「わし」、「おかん」（母）、「嫁はん」（妻）、さらに、「ぬくい」（温かい）、「えらい」（すごい）、「ほんま（に）」（本当に）などがでてくる。丁寧表現として「よろしおますか」（いいですか）、感謝場面で「おお

きに」(ありがとう)、けんか場面で「しばく」(痛めつける)などが用いられている。

文末表現として、「～や・やろ」「～やん」「～ねん」「～わ」(下降調)、「～な」などがでてくる。以下に例をあげる。

残念やったなー つらかったやろ 死んでありますやん 頼むわ  
困ってんねん 気をつけてな

また、否定表現「ん／へん」もよく用いられている。

おらん／へん こうへん (来ない) あげられへん (開けられない)  
さらに、尊敬表現の「～はる」や丁寧表現「～まっせ」が用いられている。

死んでありますやん 喜んでほったね 手が止まってまっせ

音声面、アクセントやイントネーション、そして、(東北を舞台にした『私の青おに』に比べて)多様な語彙や文末表現を用いた関西方言がドラマ全体にわたって使われている。

#### 4.3.2.2 標準語・「女ことば」

基本的に全体を通して関西方言が用いられているが、以下のように、標準語や「女ことば」が使われるときがある。

まず、主人公川村が、葬式のあいさつや見知らぬ人、地元の人であっても年上の客などに話すときに標準語を用いている。

「遺族を代表しましてご挨拶を申し上げます」

「ホテルを探してるんですけどどこもいっぱいですかね」

次に、全国チェーン店の社員(「お世話になります。シンカーズ関西支部の小池と申します」)や銀行員(「お待たせしました」)が、主にあいさつする場面で丁寧な標準語を使っている。

さらに、外国人観光客と川村がやりとりする場合の外国語に対して、標準語、「女ことば」や「男ことば」で日本語字幕がつけられている。たとえば、普段は関西方言で話している川村の言葉遣いが、英語で話すと、以下のような「男ことば」になる(「」内が日本語の字幕)。

Why don't you let me cut your hair at my salon?



「うちの店で髪を切らないか」

I'm a hairstylist from Paris. 「パリ仕込みの美容師なんだ」

また、川村に髪を切ってもらいたがっている外国人女性のことが「女ことば」で翻訳されている。

So beautiful 「とてもきれいね」 Where did you get it done? 「どこで切ったの？」 Well, then, why not? 「じゃあ、お願いしようかしら」

これらから、関西地域でも、あらたまった場面や外国語の翻訳には、標準語がふさわしいという含みが伝わってくる。

#### 4.4 方言イメージ、地域ステレオタイプ

ここでは、舞台となった地域のイメージを喚起させる要素をみていく。

##### 4.4.1 『私の青おに』

###### 4.4.1.1 東京と田舎の対比

この作品では、「東京」「田舎」ということばが随所にてでくる。以下に示す。

###### 1) 辻村の自己紹介

出版に向けた町の集まりで、学芸員が「高島出身の辻村さんにご協力をお願いした次第です」と紹介した後に、辻村が次のようなあいさつをする。

「あらためまして、東京からまいりました岩倉書房の辻村莉子です。今回は縁あってお手伝いをさせていただくことになりました」

###### 2) 母の嘆き

辻村が東京の大学に入学後、あまり帰ってこなくなったことを母が嘆く。

「大学から東京さ行ってもう10年になってはー」

###### 3) 母が学芸員について語る。

「東京からわざわざこっちさ来て、広介記念館の学芸員になるなんてたいしたもんだことよー」「なんか立派な大学出てるみたいだよ」

###### 4) 辻村が出版社社長に説明責任をはたすと学芸員に告げる。

「東京に戻ったら、もう一度ちゃんと社長と話す」

5) 辻村が元カレに電話をする。

「これから東京に帰るの」

以上、「東京」が本来の場所、あこがれの地、そして遠く離れたところであることを意識させる会話が出てくる。たとえば、1) では、辻村は地元出身と紹介されているのに、わざわざ「東京」から来たという。

次に、「田舎」ということばが2回出てくる。以下の具体例をみてみよう。

一つめは、辻村が大手の出版社をやめたことを森岡に責められたと思い、反発する場面である。

「当たり前でしょ、こんな田舎のせまい世界で生きてるあなたにはわからないだろうけど」

二つめは、宴会で、夏目が作っているワインを地元の人が紹介する。

「貴腐ワインていうのはなじみがねーから、田舎じゃ売れないんだず」東北は田舎、つまり、せまい世界であり、物のよさもわからない人たちしかいないという発想が前提とされている。

#### 4.4.1.2 自然や童話あふれる東北

NHK のドラマに限らず、たとえば岩手を舞台にする作品には宮澤賢治、石川啄木、そして『遠野物語』（例、座敷わらし）などがよく言及される。東北というと、文学、童話、伝承、自然豊かな地であることがアピールされ、自然への畏怖（食べ物の美味しさも）、助け合い、人間理解、教訓などが織り込まれ、今や失われた「日本の原風景」の場として描かれる傾向にある。『私の青おに』も、高島出身の作家浜田広介の童話を軸に展開している。ドラマでは、冒頭と最後に「ドコマデモ キミノ トモダチ」というテロップが出てくる。童話をベースにして、友情の大切さを伝えているのである。

#### 4.4.2 『アオゾラカット』

##### 4.4.2.1 ボケとツッコミ、冗談

大阪といえば、予想通り、ボケとツッコミが頻繁にでてくる。阪神タイガースにまつわる冗談も織り込まれている。今回は、その中から一つ例をあ

げる。実家の美容室に頭髪のない中年男性が客としてやってくる。接客に不慣れた主人公川村、客、そして助手とのやりとりである。

川村 どこを切ればいいでしょうか。

客 何を真面目に聞いとんねん。こっちはボケてんねんから突っ込まんかい。

助手 あ、嫌やわあ。お客さん、髪の毛忘れてきてますよ。

客 あっ、そうやった。嫁はんにやるプレゼントの金時計と交換したんやった。

この客はヘッドスパをしに来ていると助手に耳打ちされ、ヘッドスパの最中も、客が「キューティクルが剥がれんように気をつけてな」と笑わせている。

このように、この作品にも冗談や「ボケとツッコミ」という関西のイメージがはっきりとこめられている<sup>(5)</sup>。

#### 4.4.2.2 けんか腰、挑発的表現

さらに、けんか腰、挑発的表現が関西方言で随所にてでくる。以下に例をあげる。

どんだけ恥かいた思うてんねん ええかげんにせえよ なんやそれ 知るか うっさい 全部言わさんといて しばくぞ どの口が言うとな  
じゃ そんなんでは大阪では生きていかれへんで

「けんか腰、威勢のいい（脅しととれる）」活気のある関西方言が随所に使用され、世間に流通する関西イメージが展開されている。

## 5. 分析

### 5.1 内容

この2作品の内容は、友情、家族愛、地域の人とのふれあいと助け合いが共通テーマとなっている。相違点として、まず、『私の青おに』では、友情の大切さをテーマとする童話をベースに、あくまで東北は自然豊かな田舎であり、東京が本来のところ、あこがれの地であることを意識させる。地域の人たちが町のことを心から愛し、宴会も幾度か開かれ、酒を酌み交わしながら

ら、主人公を温かく受け入れ、彼女の心をほぐしていく。

一方、『アオゾラカット』は、東京や田舎といった言及は一つもなく、むしろ、「パリ仕込み」といった、より広い世界を意識させ、英語がとびかう外国人観光客が多くいるような都会として描かれている。「ボケとツッコミ」や冗談など「お笑い」のイメージと、父とはけんか腰で時に脅し文句を言い合うなど「脅し」のイメージを押し出し、活気ある会話からなる作品となっている。

2作品は、「地域の良さ」をアピールするドラマであるが、東北の方は、あくまで東京を意識した田舎を描き、関西の方は、お笑いを前面にだし、世界を意識した、活気ある都会を描いているように思われる。これは、2017年の日本社会において、東北にとっては、未だに東京は憧れの対象である一方、大阪は東京より広い世界をみすえた都会であることをアピールしているのかもしれない。作品において、東京のことをたびたび口にする東北に対して、東京のことを全く話題にしない関西は、一見、東京のことなど念頭にないように思われるが、しかし、ことばの面からみると、関西方言の使用に制限があり、標準語中心社会に組みこまれていることが確認できる。

## 5.2 方言と標準語

2作品とも、地元の方が使用されているからといって、必ずしも地元重視とはいはいきれない。まず一つめとして、標準語・「女ことば」イデオロギーが存在している。東北方言を話す登場人物は、中年から年配の地元の人や、「おばさん」タイプ、あるいは回想シーンの女子高校生といった端役の女性などであり、地元出身、地元育ちであっても、主人公を含めた中心的な役柄の、(魅力的な)成人した若い女性たちや知的な職業についている若い男性は方言を使わない。彼らのイメージに東北方言が合わないためだ。東北方言は、未だに田舎、年寄、農村をイメージさせ、さらに、童話や物語を語るのにふさわしいことばにすぎないのである。

一方、関西方言は、基本的に登場人物全員が使用する。しかし、あらたまった場面や外国語の翻訳などでは標準語が使われ、関西方言にもふさわしくな

い場合があること、つまり制限があることがわかる。大阪を舞台にしたこのドラマは、1990年代に「方言の尊重」を提唱した国語審議会において、基本はあくまで標準語（審議会では「共通語」と称している）とするとした方針にみあうものでもある。日常生活において、このような方言と標準語の「使い分け」がなされているかもしれないが、方言の使用に制限ありとする「規範」がこのドラマにおいても再生産されている。

ジェンダーからみると、NHK 連続テレビ小説でも、東北を舞台とする場合、女性主人公を東北方言母語話者という設定にしない傾向がある。一方、大阪を舞台にする場合、実話をもとにして作られた作品も多いが、そうでない場合でも、女性主人公は大阪方言を使う傾向がある<sup>(6)</sup>。

ちなみに、『私の青おに』のようなドラマにおいて、東北方言話者に、性、階層、職業、年齢などによる制限がつけられていることに関し、実態を反映しているのかどうか、若干ふれる。佐藤（1996：29-31）が実施した津軽弁話者を対象とした意識調査が一つの参考となろう。中学生から老年層までを対象にした調査である。結果は、全般的に「地元で知り合いと話しをする」時には、98%が方言を用いるということである。このことから、高島町を舞台とする、知り合いどうしの会話を中心に展開されているこのドラマが、地元出身の主人公が親はもちろんのこと（母には一回だけ使用しているが）、地元の人に対して、いっさい方言を使用しないということはかならずしも現実を反映しているものとは言えない。また、同郷の元カレと地元で話している場面でも、一切方言を使用しないのも不自然である。

二つめとして、関西方言が上で東北方言が下という方言の序列がある。ここまでみてきてよくわかるように、同じ地域ドラマでも、繰り返すが、特に東北方言ではそのイメージにふさわしくない性、階層、職業、年齢があることが、今回の作品でも確かめられた。方言ブームといわれる昨今でも、未だにこのような状態である。その点で、井上（1977a、1977b）が調査した当時の、東北方言は「若い女性にふさわしくない」というイメージがいまでもある程度有効である。さらに、「知的な職業」の人にもふさわしくないという点も加味した登場人物の設定を通して、方言イメージの再生産が行われてい

る。一方の関西方言は、全員が使用していることばである。同じ方言でも、その周縁化のされ方は、関西はソフトに、東北はよりきつくなされている。今回、東北方言がより強く周縁化されていることを示すため、全体として東北方言のドラマの方を重点的に分析・考察した。

三つめとして、方言イメージという点からみる。田中（2016：102-103）が実施した方言イメージ調査（2010年、2015年）によると、「東北＝素朴、温かい」「大阪＝おもしろい、怖い」ということである。今回の2作品は、これらの方言イメージを引き継いでいる。つまり、東北方言は「素朴、温かい」イメージの濃い田舎のことば、大阪方言は「おもしろい」「怖い」イメージの濃い都会のことばというイメージが、ドラマの基本路線として再生産されている。

最後に、使用された方言についてみる。『私の青おに』では、主人公を含む主要な登場人物が標準語を用いていることから、全体的に標準語ベースになっているのに対し、『アオゾラカット』では、関西方言がベースになっている。また、具体的な言語特徴については、東北方言は濁音化や文末表現がもっぱらであり、関西方言は音声面はもとより、語彙（「お笑い」や「けんか」にまつわるステレオタイプのものが中心ではあるが）や文末表現などについてより多様なものが用いられている。これは、全国向けドラマという文脈で、関西方言の特徴の方がより知られているためと、東北方言は濁音化にその特徴があると思われるからだろう。今回のドラマにおける方言の使用について、その量と質において差のあることが確認できた。

### 5.3 まとめ

方言地域を舞台とした2作品は、今回みてきたように、舞台は違っても、方言イメージとともに、それぞれの従来の地域のステレオタイプを再生産するものであることがわかった。2017年においても、方言によって程度差はあるが、東京中心、標準語中心、そして「女ことば」重視の発想がベースに存在している。

## 6. おわりに

なぜ、2017年の今、従来のステレオタイプに沿ったドラマが作られるのだろうか。

娯楽番組においても、出演者がステレオタイプにあわせたパフォーマンスをしているという指摘がある（Fukuda 2017, Kumagai 2017）。たとえば、「外人」は「外人」らしくふるまい、「東北人」は「東北人」らしくふるまい、視聴者の期待したステレオタイプに沿って、面白おかしくパフォーマンスする（トークする）番組が作られる傾向にあるとされる。その点では、今回取り上げた地域ドラマも、これらの娯楽番組のいまどきの流れにそうものと思われる。

このようなメディア状況をふりかえり、谷村（2012）の指摘を最後に紹介する。谷村は、短歌における方言利用について、特に東日本大震災後の短歌に、東北方言が濁音化などの特殊加工をほどこした発音表記でよく利用されていることに触れ、作られた東北方言表記を通して、「架空の東北人像」が醸成されていると述べている。その理由は、非母語話者が一方的な期待を持っていること、そして母語話者が、それらの期待に応えようとしているためだとされる。このことを今回のドラマにあてはめれば、期待された「東北像／関西像」に応えた作品ということになるだろう。このような文化現象は、エドワード・サイードのいうオリエンタリズムの日本国内版ともいえるだろう。

### 注

- (1) 1993年に初めて、国語審議会では、方言の尊重をうちだしている。（『国語審議会 答申・建議集』文化庁文化部国語課、1996年 p. 290）
- (2) 『私の青おに』は2月5日（地上波）、『アオゾラカット』は3月15日（BS）に放送されたものを対象とした。いずれも56分間のドラマである。
- (3) 『私の青おに』では近野恵美子氏が置賜ことば指導として、『アオゾラカット』では吉田真由氏、カネモッチ氏が大阪ことば指導としてクレジットされている。高島町は、山形県東置賜郡に属している。

- (4) 『泣いた赤おに』のあらすじは、人間と仲良くなりたいのに、怖がられて悩む赤おにのため、友だち思いの青おにが、自分が村であられるから、村人たちを助けに来るように伝える。この計画がうまくいき、赤おにの家にはその後、多くの村人が遊びに来るようになり、楽しく過ごしていたが、いつまでたっても青おにがあらわれない。青おには自分がいない方がいいと思い、村をでていったのである。友だちのために自分が悪者になり、身を引く話である。
- (5) 木津川計氏（『上方芸能』発行人、立命館大学教授などを歴任）は、ボケとツッコミや落ちがついていないとだめといった大阪人へのイメージがあることについて、それまでそのような大阪人に会ったことがないと語り、そのイメージが作られたものであると批判している（NHK ラジオ第一、『土曜ほっと』2016年7月16日放送）。また、井上章一氏（国際日本文化研究センター教授）は、テレビメディアが「関西＝笑い、阪神タイガースファン」というイメージを作り上げたと分析している（NHK ラジオ第二、文化講演会『ゆがめられた関西像』2017年8月27日放送）。
- (6) 具体的にいうと、東北を舞台にした作品では、女性主人公は、『どんと晴れ』（2007年放送）では神奈川出身、『あまちゃん』（2013年放送）では東京出身である（ちなみに、『あまちゃん』では、主人公アキが東北方言を学び、丁寧でない標準語をベースにした「東北方言」もどきを使用するが、のちに彼女の親友になる、地元の（魅力的な）女子高校生は東北方言を使用しない）。大阪を舞台にした作品では、実話をもとにしたもの以外でみると、『ごちそうさん』（2014年放送）では、東京出身の主人公が、結婚後に住んだ大阪で大阪方言を使用するという設定になっているし、『マッサン』（2015年放送）では、英国出身の女性主人公が、外国人なまりの日本語を話しながらも、ところどころに大阪方言を用いている。

#### 参考文献

- 井上史雄（1977a）「方言イメージの多変量解析（上）」『言語生活』311 pp. 82-91  
筑摩書房
- 井上史雄（1977b）「方言イメージの多変量解析（下）」『言語生活』312 pp. 82-88  
筑摩書房



- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店
- 熊谷滋子 (2014) 「やっぱり、東北弁は田舎の代名詞—NHK 朝の連続テレビ小説『ごちそうさん』と『あまちゃん』の比較検討」『市民の科学』 7 pp. 95–112  
見洋書房
- 熊谷滋子 (2015) 「テレビ小説『梅ちゃん先生』にみる東北観」『市民の科学』 8 pp. 102–105 見洋書房
- サイド, エドワード (1993) 今沢紀子訳『オリエンタリズム 上・下』 平凡社ライブラリー
- 佐竹久仁子 (2005) 「<女ことば/男ことば>規範をめぐる戦後の新聞の言説—国研「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」から」『阪大日本語研究』 17 pp. 111–137.
- 佐藤和之 (1996) 『方言主流社会—共生としての方言と標準語』 おうふう
- 高橋美奈子 (2010) 「沖縄生まれの戦隊ヒーローの話しことばにみる性差—人気テレビ番組「琉神マブヤー」の文字化資料の分析より—」『ことば』 31 pp. 89–112 現代日本語研究会
- 高橋美奈子 (2011) 「ローカルヒーロー作品における女性登場人物の話しことば」『ことば』 32 pp. 55–71 現代日本語研究会
- 高橋美奈子 (2012) 「なぜ方言を話すヒーローは女性なのか—「特撮ドラマ「ハルサーエイカー」の分析から—」『ことば』 33 pp. 5–19 現代日本語研究会
- 田中ゆかり (2011) 『「方言コスプレ」の時代』 岩波書店
- 田中ゆかり (2016) 『方言萌え! ?』 岩波ジュニア新書
- 谷村はるか (2012) 「故郷のクジラ餅—期待に応えないための方言」加藤英彦編集『ES 囀る』 24 (11月号) pp. 78–83.
- 中村桃子 (2007) 『「女ことば」はつくられる』 ひつじ書房
- Bucholtz, Mary and Qiuana Lopez (2011) Performing blackness, forming whiteness: linguistic minstrelsy in Hollywood film. *Journal of Sociolinguistics*, 15 (5), pp. 680–706.
- Fukuda, Chie (2017) *Gaijin* performing *gaijin* ('A foreigner performing a foreigner'): Co-construction of foreigner stereotypes in a Japanese talk show as a multimodal phenomenon. *Journal of Pragmatics*, 109, pp. 12–28.

- Higgins, Cristina and Gavin Furukawa (2012) Styling Hawai'i in Haolewood: White protagonists on a voyage of self discovery. *Multilingua*, 31, pp. 177–198.
- Hill, Jane (2008) *The Everyday Language of White Racism*. Massachusetts: Wiley-Blackwell.
- Kumagai, Shigeko (2017) Media activate native speakers to be authentic enough, a paper presented at 15<sup>th</sup> International Pragmatics Association Conference.
- Lippi-Green, Rosina (2012) *English with an Accent: Ideology, and Discrimination in the United States*, London and New York: Routledge.
- Meek, Barbra (2006) And the Injun goes “How!”: Representations of American Indian English in white public space. *Language in Society*, 35, pp. 93–128.
- Okamoto, Shigeko and Janet Shibamoto-Smith (2016) *The Social Life of the Japanese Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shibamoto-Smith, Janet and Debra Oggi (2009) The green leaves of love: Japanese romantic heroines, authentic femininity, and dialect. *Journal of Sociolinguistics*, 13 (4), pp. 524–546.

(くまがい しげこ：静岡大学)

(2017.11.8 受理)